

款に『乙亥秋日寫得東離佳色圖、崎山繡江熊斐』とあり熊斐二字の白文方印、繡江の朱文方印の二顆及び寫意の長方遊印一顆を鈐する。乙亥は寶曆五年、畫者四十三歳の、漸く圓熟の境に入る頃のものと思はれる。(田中)

六十一面觀音像

神奈川 杉本寺藏

木造 像高 一米四二・五釐(四尺七寸三厘)

一見、一木彫造の如き姿態を具へ、衣文の施設も大まかで、雄健な味はひを保ち、反り氣

十一面觀音像(側面)

味の姿勢と引縮つた肉附と

は雄々しい面

容と相俟つて、

一種儼乎たる

表現を持ち弘

仁彫刻に見る

古致を残して

居るが、寄木

内刻像 兩手を

以て寄せたと思

はれる以外、現

在木寄の位置は

全く不明である

が、明かに内

趣致及び刀痕の

淺き穩健な手法

よりすれば、恐

らく藤原期の中頃、古様を傳へた作者の手に製作されたものと推定することが出來ると共に、關東地方に遺存する彫像中最も優秀な作品の一である。

材は檜材で之に漆箔を施したものであるが殆んど剝落し、唯僅かな殘存によつて之を知るのみで檜の木肌を露はにして居る。眼、天冠臺等は刻出で、今、

唇に朱、口邊に鬚の墨描きを存する。恐らく後代の補加であらう。左手臂より先、右足先及び天衣の右手首下及左手下に垂下する部分及び天冠臺上の十一面、白毫、寶瓶、臺座、光背等は何れも後世の補修に屬する。

本寺には此の外に尙一體の觀音像^{十三}を藏し、同じく十一面觀音で、玉眼嵌入の漆箔像、全身に布目が現はれて居り口邊、天衣等に僅かな金箔の存在を見る。前者に比すれば像高稍、低く、身體の各部共に細目で、既に形式化の跡が多分に見られるが、面相、肉身等引縮つて衣文の襞積もよく均齊を保ち、何

神奈川 杉本寺藏

等くづれを見せ

ては居ない。作

としては前者に

劣るが恐らく鎌

倉中期を下らぬ

ものであらう。

惟ふに本寺杉

本寺は古く大倉

觀音堂と稱し、

賴朝以後鎌倉將

軍の崇敬厚く、

吾妻鏡建久二年

九月十八日の條

に

幕下御參大倉觀音堂、是大倉行事章創伽藍也、累年風霜侵而薨破軒傾也、殊有御憐愍、爲修理、以准布二百段、奉加之給

とある以來、屢々本寺に關する記事を見る。不幸にして尊像奉安の記事を逸して居るが、鎌倉期の作に係る後者の、こゝに遺存するも其の所以を想像し得ると共に、また文治五年十一月廿三日の條に

十一
面
觀
音
像

神奈川
杉本寺藏

終日風烈、入夜大倉觀音堂回祿、失火云々、別當淨臺房見煙火涕泣、到堂祠悲歎、則爲奉出本尊、走入焰中（中略）忽然奉出之

とあるもの、或は現時の本尊即ち上記藤朝期の古像であらうか。

以上二像は他の未完成とも思はれる頗る稚拙な一體の觀音像と共に、同一厨子内に納められて居るが、尙其の前立として一尊の十一面觀音像がある。これは遙かに後作であるが、その臺座の銘及び堂内に遺存する板札の墨書によつて寶永年間に上記兩尊の臺座光背等の修補、再興が行はれたことが知られる。本

内外彙報

關野貞氏の訃 東京帝國大學名譽教授工學博士關野貞氏は七月二十九日白血病の爲東京帝國大學醫學部附屬醫院に於て享年六十九歳を以て薨去せられた。

博士は慶應三年十二月十五日舊高田藩士の家に生れ明治二十八年工科大学造家學科を卒業、翌二十九年東京美術學校講師となり、爾來東洋及び日本建築史を講じて今日に及び、また同年内務省囑託として古社寺保存計畫に參與し、次いで奈良縣技師として古社寺の修理を擔當し傍ら大阪に於ける日本生命保險會社本社の設計に従事せられた。右は博士の設計に掛る唯一の洋式建築である。明治三十四年工科大学助教授に任ぜられ内務省文部省並に造神宮技師を兼任し翌明治三十五年六月韓國へ出張を命ぜられ、始めて同國建築の調査研究に手を染められた。尋いで法隆寺金堂塔婆及中門非再建論、平城京及大内裏考等を發表し、四十一年工學博士の學位を授けらる。同年韓國度支部より古建築調査に關する事務の囑託を受け、四十三年十月改めて朝鮮總督府より古建築古蹟等藝術に關する調査を囑託せられ、大正四年始めて朝鮮古蹟圖譜第一冊を編纂し爾來引續き十五冊を公刊せられた。大正六年之が功績に對し、佛國學士院金石學及美文學院よりスタニスラスジュリアン賞金を贈らる。大正七年建築史研究の

堂は大震災によつて倒壊したが、此等の諸像は奇しくもその禍を免れて何等の影響もなかつたと云ふ。（豊岡）

七 蟠螭禽獸文鐸 大阪 山中定次郎氏藏

銅製 高一八・二釐（六寸）

（梅原末治「近時所見の蟠螭禽獸文鐸に就いて」参照）

爲め支那・印度・英・佛・伊の諸國に留學を命ぜられ、同九年歸朝、直ちに教授となり、從前の通り内務・文部兩技師を兼任し、古社寺（現今の國寶）保存會委員、史蹟名勝天然紀念物調査會臨時委員、學術研究會議員等被仰付、昭和三年依願本官を免ぜられ、尋いで東京帝國大學名譽教授の稱號を授けられた。昭和四年四月東方文化學院東京研究所の設立せらるゝや其評議員となり併せて研究員として支那歷代帝王陵の研究に従事し、同八年其研究を完了し、引續き遼金時代の建築の研究に當り、既に遼金時代の建築と其佛像圖版上下二冊を公刊し之と同時に熱河の諸建築の研究を遂げ圖版四冊を公表し、更に日滿文化協會評議員として幾多の研究問題其他重要なる提案をなし着々其功を收められつつあつた。

博士の我が美術史界の先覺として今日に至るまでの業績は到底一旦にして數ふべからず、今その訃に接して唯茫然たるものがあるが、就中その直前に最も力を注がれて居た大陸半島美術に關する研究が凡て半途に終れるの痛嘆に餘りあるを思ふのである。次に博士の今日までに公表せられたる最も主要なる著作を擧げてその迹を忍ぶ。（編輯部）